女優論

ジャンヌ・モローの死

―フランスのメディアから―

安井廣之　クリニック院長

昨年七月三一日に、ジャンヌ・モローがパリ第八区の自宅マンションで死亡しているのを、家事手伝いの女性が見つけた。

響きわたるマイルス・デヴィスのトランペットの調べとともに、夜のパリを歩きまわる彼女の姿が今もくっきりと脳裏に浮かぶ。『死刑台のエレベーター』だ。あの魔的な妖艶さには、心にたがねを打ち込まれたような衝撃を受けたのだった。

「彼女はいつも愛を求めていた。そしてその生け贄たちは、次々と道ばたに置き去りにされた」。

これは多くの女優と浮名を流し、カトリーヌ・ドヌーヴとの間に娘まで作ったマルチェロ・マストロヤンニの言葉である。いかにも次の男のもとに行かれてしまったつらさと悔しさを表す言葉ではないか。

だが、置き去りにされたのは彼だけではない。ルイ・マル、ジャンポール・ベルモンド、ピエール・カルダン、ジョルジュ・ムスタキ・・・と枚挙にいとまがない。ただ、オーソン・ウエルズの口説きには応じなかったと伝えられている。

彼女と共演したこともあり、無二の親友と自認するブリジット・バルドーは言う。

「彼女には並はずれた誘惑の才がありました。その裏で、焼きを入れた鋼のように強靭な性格が見え隠れしていましたが。彼女には、美しいとか危険だとかを超えたより大きな邪悪さがありました」

「確かにジャンヌ・モローは男たらしだった。しかし、その都度彼女は自分の全てを捧げていた」―パリ・マッチ誌カトリーヌ・シュワーブ。

「彼女の異質な魅力、まねのできない声、神秘的な存在感、大胆さ。マル、トリュフォー、ブニュエル、アントニオーニ・・・皆がみなジャンヌ・モローに魅了され、霊感を吹き込まれたが、いつも彼女は彼らの手からすり抜けていった」―テレラマ誌ピエール・ミュラ。

フランスのエマニュエル・マクロン大統領は弔辞を捧げ、その中で次のように述べた。

「彼女は自分の複雑さ、記憶、主張を映画という形で体現した芸術家でありました」

ジャンヌ・モロー

フランスでは新聞雑誌が一斉に彼女の死を取りあげ、追悼記事を組んだ。私はフランスの友人に頼んで、ル・モンド紙、大衆週刊誌パリ・マッチ、映像専門誌テレラマの切り抜きを送ってもらい、この老女優の死に対するフランス人の反応を見てみた。中でも、インテリ向けの中道左派系ル・モンド紙は三ページ全面を使い、何枚も写真を入れた回顧録風の特集を組み、その死を悼んだ。

それらの中から、二〇一七年八月二日（水）づけのル・モンド紙の記事を選び、映画に関する部分を拙訳で紹介してみよう。なお、この記事と全く同じ文章がインターネット上に公開されている。次のURLを参照されたい。

http://www.lemonde.fr/disparitions/article/2017/07/31/mort-de-jeanne-moreau-grande-comedienne-et-personnalite-insoumise_5166900_3382.html

ジャンヌ・モロー、七月三一日に死去

人の心をかき乱し、不服従をつらぬく

舞台女優であり、歌手であり、映画女優であり監督でもあったジャンヌ・モローが、七月三一日に亡くなった。八九歳だった。低くて心をかき乱す声、欲望をそそる誘惑ぶり、不服従な個性、生涯を通じての強いえり好み、それらによって彼女はフランスの、かつまた国際的な大スターの一人となった。

二〇一二年に、彼女は、二七年前から住むパリ第八区のサル・プレイエル（フォブール・サントノレ通りにあるコンサートホール、安井注）の近くにある自宅マンションにル・モンド紙の記者を迎え入れた。大の読書好きで、ワルター・ベンジャミン、ギヨ

ーム・アポリネール、ジェームス・ジョイスの全作品を持ち、他にも数多くの書籍が本棚に積まれていた。これらが彼女の教養の元となったのである。「私は世の独学の人たちと同じように随分たくさんの本を読んできました。家では本を読むのは禁じられていました。父が好まなかったからです。だから、隠れて読みました。安物のローソクをともしてね。おかげで、鼻の穴が真っ黒になってしまって・・・」と彼女は笑った。

売春婦が家族代わり

ジャンヌ・モローは一九二八年一月二三日にパリで生まれ、幼年時代の一時期をヴィシーで過ごす。その後パリに戻って家族とともに暮らし、中等教育を終える。父親はパリ第九区でレストランを営み、母はイギリス人の踊り子（フォリー・ベルジェール劇場でジョセフィン・ベーカーを囲むグループダンサーの一人、安井注）だった。ジャンヌは演劇に夢中になり、コメディー・フランセーズ（主に古典劇を上演する国立劇場、安井注）のドニ・ディネスの講習会にかよった。父親はそれを承服せず、彼女を家から追い出した。

そのとき、代わりの家族が現れる。

「私は、激しやすく心が離れ離れになった両親に育てられました。母はイギリス人で、フランス語をうまく話せませんでした。父は浮気をし、いざこざが絶えませんでした。私たち家族はモンマルトルの連れ込み兼用のホテルに住んでいました。で、ホテルに来る売春婦たちとても親しくなりました。だから、父に追い出されたときには、彼女たちが面倒をみてくれ、親しくしてくれました。彼女たちこそ私の舞台の最初の観客で、私のことをとても自慢していました。彼女たちはコメディー・フランセーズにまで私を観に来てくれました。夜遅くなって地下鉄の終電に間に合わなくなったり、タクシーに乗るにはお金が足りなかったりしたときには、彼女たちが私を連れて帰ってくれました。素敵な女性たちでした、気前もよくて」

一九四六年に、彼女はコメディー・フランセーズの聴講生となる。そして一九五〇年、ジャン・メイエール演出によるアンドレ・ジード原作の『法王庁の抜け穴』に出演し、まさに娼婦役で当たりを取った。これが演劇における類を見ない輝かしい経歴の始まりであった。

映画も彼女に門を開く。彼女の最初の映画はアナベラと共演したジャン・ステリ監督の『最後の恋』で、一九四九年の封切りである。同年、俳優兼監督のジャンルイ・リシャールと結婚して息子ジェロームを生むが、一九五一年に離婚する。後になって、もと夫はフランソワ・トリュフォー監督の専属シナリオライターとなる。同監督のもとで、ジャンヌ・モローは一九六二年に、神話となった『突然炎のごとく』に出演する。これは悲劇に終わる三

角関係の恋の物語である。映画の中で、彼女は「つむじ風」を歌い、束縛から解き放たれた現代のヒロインを体現する。この役はその後映画の中で彼女が演じ続ける役回りであり、演じられた人物たちは、彼女の反抗的な性格そのままのものであった。

「潜水夫だった男の映画に出るんですか？」

しかし、『大人は判ってくれない』の監督（トリュフォーのこと、安井注）と出会う前に、運命を決するルイ・マル監督との出会いがあった。彼は一九五七年に、『死刑台のエレベーター』で、夫殺しの共犯者の役に彼女を当てる。ルイ・マルは『沈黙の世界』を撮影したクストー大佐の助手で、当時自分では一本の映画も撮ったことがなかった。しかし彼女は彼の頼みに応える。「私がルイ・マルと仕事をすると決めたとき、当時の私の代理人は辞めてしまいました。『貴女は潜水夫だった男の映画に出るんですか？』って言われましたよ。ルイ・マルは、カンヌ映画祭の会場の廊下で、フランソワ・トリュフォーを紹介してくれました。フランソワは私に事務所の電話番号を手渡し、是非話したいことがあると言いました。それは『突然炎のごとく』についてのことでした。彼が『大人は判ってくれない』を撮る前の話ですよ」

ルイ・マルの映画とマイルス・デヴィスによる有名なテーマ音楽により、ジャンヌ・モローの名は一躍知れわたる。一九六〇年代は幸運が続き、国際的なスターとしての座を確立する。彼女は、駆け出し（ルイ・マルを指していると思われる、安井注）ではなく、映画界から追放されていたオーソン・ウエルズ監督の『審判』（一九六二年）に出演し、彼にツキを与える。「私はオーソン・ウエルズの映画に出ることを承諾しました。みんなはあの男はもう終わっていると言いましたが」

彼女は一九五〇年代にジル・グランジエやアンリ・ドクアンに誠実であったように、その後も自分を使ってくれた監督たちに誠実に応えた。ウエルズのもとで『フォルスタッフ』（一九六六年）と『イモータル・ストーリー』（一九六八年）に、ルイ・マル監督のもとでは『恋人たち』（一九五八年）、『鬼火』（一九六三年）、『ビバ！マリア』（一九六五年）に出演する。ジャック・ドミ監督の『天使の入り江』で、彼女はプラチナブロンドの髪をつけ、男を破滅させる女ばくち打ちを演ずる。

彼女の美しさと演技の絶頂期には、ジョゼフ・ロージーの『エヴァの匂い』（一九六二年）、ジョン・フランケンハイマーの『大列車作戦』（一九六四年）とアメリカで仕事を続け、さらにトニー・リチャードソンの『マドモアゼル』（一九六六年）に出演し、同監督と同棲する。このために、彼はヴァネッサ・レッドグレーヴと離婚する。この映画のシナリオはマルグリット・デュラスとジャン・ジュネの共著である。彼女はジュネとても親しかった。「私が『マドモアゼル』を紹介するためと『天使の入り江』でかぶるかつらを買うためにロンドンに行って帰ってきたとき、誰だと思

います、タクシー待ちの行列の後ろに隠れていたのは？　ジャン・ジュネです。彼は『マドモアゼル』で私が糞仕事をしやがったとこきおろしました。私があの映画を穢したと言って怒ったんです。でもね、これは彼が満足しているということを私に伝えるやりかたなんです。ジャンは、聖人なんです。心のすごく広いひとなの。頭がおかしいくらい。彼を好きになったとたんに、あの人はぶち壊すのよ。彼は愛に堪えられないの。性格が悪いの。だから私はいつも彼をからかっていました」

ロールフィルム映写機
シネマミュージアム(スペイン)

文人たちとのつきあい

彼女の文人たちとの交友はよく知られている。ジャンヌ・モローは前世紀の最も主だった作家たち、すなわちポール・レオトー（「お世辞を言わない男」）からアンドレ・ジードに至るまで親交があった。ブレーズ・サンドラーズやテネシー・ウイリアムズもその中に含まれる。彼女はヘンリー・ミラーとも、彼のパートナーのアナイス・ニンの仲介で知り合った。ミラーは彼女に、二人の交友については人に話さないよう助言する。「あの助言がなかったら、私はハリウッドでひどい噂を立てられたでしょうに」としばしば彼女は言っていた。一九六〇年代には、ジャンヌ・モローは今では古典となった作品で名を上げる。ミケランジェロ・アントニオーニの『夜』（一九六一年）、ルイス・ブニュエルの『小間使いの日記』（一九六四年）、フランソワ・トリュフォーの『黒衣の花嫁』（一九六七年）などである。

一九七〇年代には、彼女の映画の記念碑に他の大物監督が名を連ねることになる。エリア・カザンが『ラスト・タイクーン』（一九七六年）、アンドレ・テシネが『フランスでの思い出』（一九七五年）、そしてマルグリット・デュラスが『ナタリー・グランジェ』（一九七三年）で彼女の翳りのあるオーラをうまく使い、ジェラール・ドパルデューの相手役に選ぶ。彼女は一年後にベルトラン・ブリエの『バルスーズ』でドパルデューと共演する。この映画はスキャンダルを巻き起こす。しかし、ジャンヌ・モローはそれにくじけず、『パリの灯は遠く』（一九七六年）で、ジョゼフ・ロージーの信頼を新たにする。

喜劇の才能

彼女はオーソン・ウエルズの勧めで一九七六年に映画を監督し、喜劇の才のあることを証明する。それは女同士の友情を描いた映画で、『ナタリー・グランジェ』でパートナーだったルシア・ボゼと共同で監督した『光』である。「私は『光』のシナリオを書き、フランソワ・トリュフォーに送りました。彼はそれにコメントを付けて送り返してきました。私が〝これは私のじゃなく、あなたの映画なんですが〟と言うと、彼は満足せず、その後私たちはうまくいかなくなりました」と彼女は言う。

彼女は一九七九年に『ジャンヌ・モローの思春期』で、再び監督をする。この映画は第二次世界大戦前夜の思春期の少女の恋の優柔不断を描いたもので、シモーヌ・シニョレを抜擢する。同じ年、二年間続いたアメリカ人監督ウィリアム・フリードキンとの結婚生活に終止符を打つ。その少しあとで、女優好きの彼女は、ハリウッドの女優たちに関する一連のドキュメンタリーを制作する。グレタ・ガルボとエヴァ・ガードナーから同意を取りつけ、リリアン・ギシュの肖像を撮るが、これはまだ公開されていない。

一九八一年にドイツ人監督ライナー・ウエルナー・ファスビンダーが魅惑的な作品『ケレル』で彼女に売春宿の女あるじの役を当てるが、フィルムの編集を終える前に彼は死亡する。映画は遺作として、一九八二年にヴェネツィア映画祭に出品される。また八〇年代には、ジャンヌ・モローは、ジャンピエール・モッキと彼の『Le Miraculé〈「奇跡の人」の意、安井注〉』（一九八七年）のおかげでそれまで見せなかった喜劇の才を披露することになる。

ロラン・エヌマン監督の『海を渡るジャンヌ』で、彼女は一九九二年にセザール最優秀女優賞を受ける。一九九〇年から二〇一〇年の間には、彼女は著明な監督たちの作品になお登場する。テオ・アンゲロプロス『こうのとり、たちずさんで』（一九九一年）、ウィム・ヴェンダース『夢の涯てまでも』（一九九一年）、アモス・ジタイ『撤退』（二〇〇七年）、ツァイ・ミンリャン『ヴィザージュ』（二〇〇九年）、さらにマノエル・デ・オリヴェイラ『家族の灯り』（二〇一二年）等である。

「このエネルギーがなくなる日が来たら、私は消えます」

彼女の最後の映画は、アレックス・ルッツの『Le Talent de mes amis（「友人たちの才能」の意、安井注）』（二〇一五年）である。初心者監督と仕事をすることにより、ジャンヌ・モローは若手の監督を支援し続けてきた。そうすることで、彼女自身もチャンスをつかんできたのだ。その流儀で、彼女が名付け親となっているプルミエ・プラン映画祭の枠組みの中に、Les Ateliers d' Angers（「アンジェの仕事場」の意、安井注）を設けて訓練と出会いの場とし、新人の登場を奨励してきた。これは彼女の誇りにしている自主的な活動で、彼女の受けた幾多の褒賞以上に彼女の心を満たすものであった。

一九九八年に彼女のこれまでの全経歴に対してオスカー名誉賞を授与された。また、一九九五年にはセザール名誉賞も受けている。二〇〇八年には二度目のセザール名誉賞を受賞するが、そのトロフィーを、初めての長編『水の中のつぼみ』を撮ったセリーヌ・シアマと彼女のチームに贈っている。なお彼女はこの映画には出演していない。

彼女は偉大なる誘惑者であり恋する女性であったが、人々が彼女をただ過去の映画の記憶としてしか見ないことを好まなかった。「私は記憶ではなく人間でありたい。私は演劇の才能を持って生まれました。その才能に頼ってはいますが、縛られてはいません。私はこの才能とこれを伸ばすのを助けてくれた人たち、それと、映画人のかたがた、俳優さんたち、観客のかたがたを大切にしたい。私にこのエネルギーがなくなる日が来たら、私は消えます」と彼女は心のうちを述べた。彼女は、若い世代に、熱い思いを込めて、比類のない映画の遺産を伝えたのである。